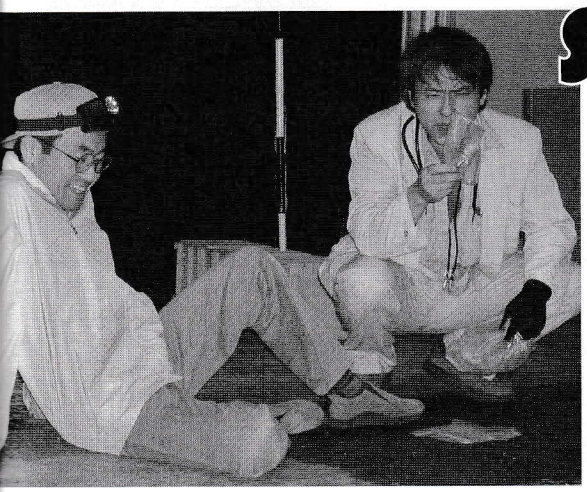
AMUSEMENT SQUARE

stage



演劇空間スペースベン

劇評『KAN—KAN男』

〈文／観劇人・邑峰絵里〉

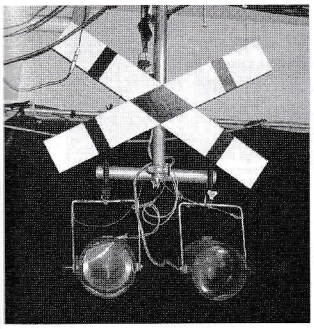
〝劇評〟なるものを依頼されてしまった。初体験！なので、まあ、発言の稚拙さやら、暴言やらの数々にお許しを。（とは申しましても、活字になる限り責任のある発言をせねば！）

FANSプロデュースシアター『KAN—KAN男』は、佃典彦（劇団B級遊撃隊）の作品である。1996年に第二回劇作家協会優秀新人戯曲賞と第四回読売演劇大賞優秀賞を受賞した『KAN—KAN』という戯曲を1998年に改訂した作品である。

今回、私は予備知識なく観劇した。タイトルである〝KAN—KAN〟の意味も知らずに。会場に入るなり、舞台装置から〝KAN—KAN〟は遮断機の警報音であることを知った。舞台上には遮断機をイメージさせる照明。おそらくここは踏み切りだ。会社の看板、なぜか手袋が天井からぶら下がる。黒を基調にしたシンプルな舞台である。

KAN—KAN男という二人の男。一人は踏み切りで列車事故でバラバラになった轢死体のパーツを探す。なぜか両手に黒い手袋。もう一人の男は、その轢死体の主であろう女性の通夜に出席し、情報を収集した後、この男もまた、一緒にその轢死体のパーツを探す。この二人の関係は、前者が依頼主というか主導権を握る存在。後者は協力者であるが、その関係はあごで使われるような関係に見える。踏み切りで長いこと探している黒手袋の男はパーツを見つけられないでいるが、後から来た男は次々と見つける。看板など意外なところに飛び散ったパーツ。徐々にパーツが揃う。彼らが無残にもばらばらになった轢死体のパーツを探す理由は、轢死体の遺族から多額の謝礼をもらうため。今回の轢死体の主はどうやら会社社長の娘らしい。二人は俄然やる気をみせ、パーツ探しに没頭。始発列車までの限られた時間の中でより多くのパーツを探そうとしているのだ。

この二人の場面と交互にもう一つの場面が描かれる。洗面器を持つ女とテレビを持つ男。踏み切りですれ違いざま、夜にテレビを持ち歩く男を不審に感じ声を掛けた女。執拗な女の問いかけに、男がテレビを持っている経緯などが語られる。滑稽な問答が繰り返されながら、徐々にこの女の素性が明らかになり始める。百合子という名の女。なぜかこの女の持つ洗面器には免許証や携帯食、そしてお気に入りのハイヒール。彼女は家出をしたばかりだという。奇妙な家出。この二人はなぜか踏み切りを渡ることができない。



二人のKAN—KAN男が探しているのはこの女の死体のパーツであるのだろうか。それとも男の方か。観る者にそう推理させる話の展開。パーツがほぼ揃い、あとは左手。左手を探すうちに死体の性別が判明する。女ではなく、男。百合子ではなかったのだ。そして、意外な真相。実はこの死体の主は黒手袋のKAN—KAN男だったのだ。そう、途中から黒手袋のKAN—KAN男の右手には黒手袋がはめられていなかったのだ。そうかそうか、そういうことだったのか！と。黒手袋のKAN—KAN男が指示を与えるだけで、自分では探し当てられなかったのは、手が無かったからなのか!!と。脚本の絶妙さに感心。途中、踏み切りにたたずむ赤ん坊を抱いた女（幽霊）や珍妙な箱売りの三人組などが絡む。

この芝居は主に二人のKAN—KAN男の世界と、踏み切りで問答をする男女の世界の二つの世界で構成されている。同じ踏み切り。現在と過去。時間を行きつ戻りつしながらストーリーが展開する。死体が完成するにつれて明らかになる真実。面白い芝居であった。

近年、映像を用いた芝居は多いが、この芝居には、果たして映像は必要だっただろうかと疑問を抱く。舞台上の演技だけで、観客は想像力を膨らませ、鑑賞することができたであろう。観客に身を委ねるのが怖かったのか、映像が使われた。スクリーンを設置するための演出についてもさることながら、踏み切りが映像によって具体化されたために、観客から失われた想像力は大きい。そう感じたのは私だけだろうか。映像の踏み切りと舞台の雰囲気とのギャップ、スクリーンの設置による芝居の流れの分断など映像の与える影響についてもう少し配慮してもらえたら…などと感じた。一週間ほど前にナイロン100℃の『ハルディンホテル』を見た後だけに、映像を芝居に持ち込む時の演出が気になった。

1月の Friday Amusement Negative Shop

■1月2日（第517回）
勝手に新年会

■1月9日（第518回）
紫葉実
シバミからおけBOX化計画

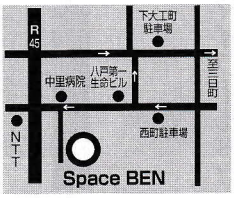
■1月16日（第519回）
未定

■1月23日（第520回）
未定

■1月30日（第521回）
紫葉実
シバミからおけBOX化計画

○FANS番外2月予告
2月1日（日）
蛭子ハウスライブ

※全て午後7時30分～、料金500円
チケットはスペースベンにて販売



駐車場はございませんので、車でのご来場はご遠慮下さい。
（近くに西町駐車場有り）

問 スペースベン
八戸市柏崎1—11—8
☎ 43-9876
FAX 03-5908-9120

※スペースベンの上演内容は、ホームページまたはメールマガジンでご確認下さい。

※スペースベンでは、毎週月曜日午後7時30分から、沼尾美也子さんによりますジャズダンスレッスンを開催しています。一度見学にいらして下さい。

FANSでは、脚本を広く募集しています。何か表現したくても踏み出せないでいるあなた、一度『物語』を書いてみませんか？ FANSでは、そんな方の思いを大切にして舞台にのせてみたいと思っております。

☞ スペースベンHPアドレス http://spaceben.com/
Eメールアドレス owner@spaceben.com